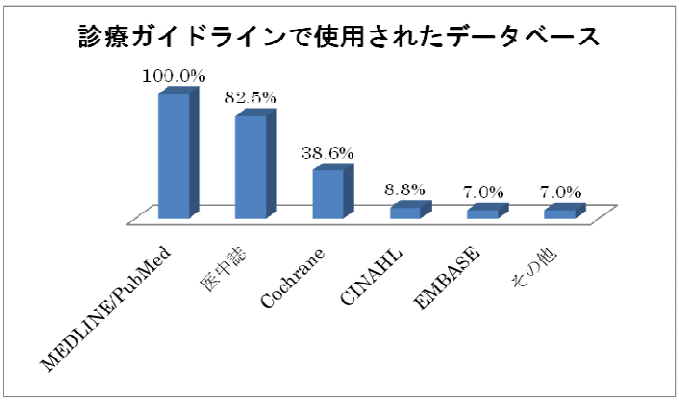
診療ガイドラインのエビデンス

－参考文献のデータベースでの収録状況－

阿部　信一、細矢　敬子
東京慈恵会医科大学学術情報センター

臨床試験などの科学的根拠に基づいてまとめられた診療ガイドラインが増えてきている。厚生労働省の委託事業として運営されている、医療情報サービス Minds では現在国内の医学会等によって作成された診療ガイドラインやエビデンス集が公開されている。これらには根拠となった文献を収集する方法についても通常は記載されている。2011 年 5 月時点で掲載されている疾患は 75 種類で、そのうち文献収集方法について記載が確認できたものは、参照が指示された冊子体も含めて 57 疾患(76%)だった。これらについて使用したデータベースを見てみると、そのすべてで PubMed または MEDLINE が使用されていた。その他、医学中央雑誌が 82.5%、The Cochrane Library が 38.6%、CINAHL が 8.8%、EMBASE が 7.0%、その他 7.0%だった。実際には、主要雑誌のハンドサーチを行ったり、海外の関連するガイドラインを参照している場合も多いものの、わが国の診療ガイドライン作成における系統的な情報検索は MEDLINE と医学中央雑誌を使ったものがほとんどであると言える。



今回、MEDLINE と医学中央雑誌以外のデータベースを検索する必要性について検証するために、上記の 57 疾患のうちこれら 2 つ以外のデータベースの使用が明記された診療ガイドラインの参考文献の収録状況を調査した。

診療ガイドラインの作成は、その分野の第一人者によらなければ信頼されにくく利用されない。当然そのような専門家は診療や研究などに多忙を極めている。また、作成に使用できる予算と時間は限られているため、ある程度の“線引き”は必要であり、情報収集を MEDLINE と医学中央雑誌に限定することはやむを得ないかもしれない。しかしながら、その作業に協力する情報専門職としては他のデータベースの特徴や検索漏れのリスクを知った上で、診療ガイドラインの作成に関わるべきである。